

アンラーニングプロジェクト09

2009. 10. 11

生・労働・運動ネット

富山市神通町3-5-3

TEL 076-441-7843

FAX 076-444-6093

# ニュースレター

ベーシックインカム

## レポート:「全ての者に無条件で基本所得を! ——山森亮『ベーシック・インカム入門(光文社新書)』を読む」(7/12・8/30)での論議から

「アンラーニングプロジェクト09」では、7月12日(日)と8月30日(日)の2回に渡り、山森亮著「ベーシック・インカム入門 無条件給付の所得保障を考える(光文社新書)」を素材として、上記のようなタイトルで学習会を行いました。以下、そこでの主な論議を紹介します。

### □ベーシックインカムをめぐる論議の「系譜」をたどる——「ベーシック・インカム入門」のアウトラインから

「ベーシック・インカム入門」の第1章でも指摘されていますが、この国での最後の「命綱」である生活保護制度の「捕捉率」はわずか20%であり、つまり必要な人の5人に4人が制度を利用できていません。その数字にも表れているように、この国の社会保障・福祉制度は、最低限、人間の生存を保障するためのセーフティーネットとして機能していないという現状があります。賃労働に従事していない人たちを蔑視して、人間の命の「序列化」・「選別化」や、低く見積もられた命の「廃棄」を行うという傾向が、とりわけ日本型の「福祉国家」では強いように思います。ドイツやフランスといった国々でも、90年代後半から、所得保障の縮減と就労への強制をセットにした「ワークフェア」的な福祉の動向が顕著になっています。それに対して、従来の福祉制度の維持ではなく、全ての人が無条件で生活に必要な所得を無条件で得る権利としてのベーシックインカムを要求する団体やグループが登場するようになってきています。

同書の第2章と第3章で描かれているように、60年代末から70年代にかけて、世界各地での様々な社会運動の中で、ベーシックインカムが共通の要求項目として掲げられていました。例えば、60年代末の公民権運動で有名なアメリカのキング牧

師は、黒人だけではなく白人の貧困層も含めてワシントンへの集結を計画した 68 年の「貧者の行進」のスローガンの一つとして、ベーシックインカムを要求しています。キング牧師は、当時の「福祉権運動」から強い影響を受けていますが、この運動を中心的に担ったのが、AFDC(要扶養児童家庭扶助)の受給者である黒人女性のシングルマザーたちでした。66 年にはNWRO(全国福祉権団体)が結成され、ソーシャルワーカーによる恣意的な審査や嫌がらせに抗議すると共に、よりまともな福祉制度を要求しました。そのNWROが、「福祉から性差別を取り除く」ために要求した「適切な所得保障」こそが、今で言うベーシックインカムに他なりません。

そうしたアメリカの黒人女性たちの運動は、遠くイタリアでも、マリアローザ・ダラコスタといったフェミニストたちに注目されていました。イタリアでは、60 年代末から 70 年代末にかけて、戦闘的な職場占拠やストライキと併せて、公共料金の「自己値引き」運動や空き屋の占拠など、工場の内外をつないで、「アウトノミア運動」が活発に展開されました。その中で、大学で学生が学ぶことも「労働」だとして「学生賃金」を要求することが行われましたが、イタリアのパドアの女性グループも、「家事労働に賃金を！」というスローガンを掲げて、「生産性や労働時間とは切り離された『保障賃金(ベーシックインカム)』」を要求しています。

残念ながら、70～80 年代にかけてほとんどが自然消滅したようですが、60 年代末からのイギリスでは、老人、障害者、シングルマザー、失業者等、それまで共通の利害をもつとは見なされてこなかった人々が、公的な福祉サービスをめぐって同様の要求をもっているという点で結びつこうとした「要求者組合運動」が活発に展開されました。当時の主流派の労働運動では、失業問題への取り組みとして「働く権利」キャンペーンが行われていました。しかし、障害者や病者といった人たちにとっては「働く権利」だけでは問題が解決しないことへの批判から、要求者組合運動では、ベーシックインカムと併せて、住宅や生活必需品の無料化も要求していました。

イタリアのアウトノミア運動の思想家のアントニオ・ネグリは、今や社会自体が一つの「生産工場」と化しているという意味で、失業者や福祉受給者も「生産的」な存在であり、「生きていること自体が報酬の対象になる」と主張しています。それと同様の訴えが、日本の 70 年代の「青い芝」による障害者運動の中で行われたことに、同書の著者は注目しています。「青い芝」はベーシックインカムそのものを要求したわけではありませんが、賃労働に従事していないことへの世間の蔑視に抗議して、「障害者にとっての労働とは、即、生きていくこと」だとする「青い芝」の主張は、アメリカ、イタリア、イギリスでベーシックインカムを要求した運動の論理と、大きな類似性や同時代性をもつものです。

同書の後半では、社会・経済思想や経済政策をめぐる論議の中でベーシックインカムやそれに類する仕組みがどのように論じられてきたのかが、紹介されています。

狭義のベーシックインカムを初めて提唱したのは、18 世紀末の社会思想家トマス・スペン

スです。彼は土地を居住・農耕のために占有することに対して支払われる地代から、公務員の給料等の必要経費を差し引いた上で、それを年に 4 回、コミュニティーの成員間で平等に分配されなくてはならないという主張を行っています。そうした主張は、イングランドのいくつかの地方で農民に対して生活維持に必要な分の所得保障を実施した「スピーナムランド制」と並んで、当時、「権利としての福祉」という理念が誕生したことを物語るものでしょう。

その後、19 世紀の半ば、フランスの社会思想家フーリエの影響を強く受けたベルギーの著述家のシャルリエは、スペインと同様に、自然権思想に基づき、人類の共有財産である土地が私有化されていることの解決策として、地代を財源として「保証された最低限」を全ての人に給付することを提唱しています。また、彼は、「飢餓への恐怖」による労働ではなく、基本的な必要の充足が保証されている人たちの労働の方がより優れていると主張しています。

そうしたフーリエ的な労働観を、19 世紀のイギリス古典派経済学者のジョン・スチュワート・ミルもその著書の「経済学原理」の中で好意的に紹介していますが、ベーシックインカム的なものをめぐる経済学上の論議が本格的に行われるようになるのは、第一次大戦後のことです。イギリスでは、産業化の進展が労働や生活の人間らしさを剥奪するという批判から、「ギルド社会主義」の論陣が 1910 年代に張られます。そうした運動の中から、生産されたものを購入するだけの所得が労働者になくことが失業や貧困が蔓延する原因であるとして、「国民配当(社会クレジット)」という名のベーシックインカムが提唱されていました。

第二次大戦後の福祉国家は、二人の経済学者の名を冠して「ケインズ＝ベヴァレッジ型」福祉国家とも呼ばれていますが、ベヴァレッジとケインズの社会保険中心の福祉制度の考え方に対して、経済学者のミードは税方式中心の制度を主張しています。ケインズ自身、考え方としてはミードの主張に部があることを認めています。ミードは世を去るまで、「社会配当」という名でのベーシックインカムを主張していました。また、戦後のイギリスの社会保障制度の「青写真」となった「ベヴァレッジ報告書」への対案として、ジュリエット・リズ＝ウイリアムズは「社会配当」を提起しています。これは、就労の意志があることや、家事労働に従事しているといった条件付きのものではありますが、税方式でミーンズテスト(資産調査)抜きで給付するという点では、ベーシックインカム型の所得保障と言えるでしょう。事実、彼女の提起は、イギリスでベーシックインカムの発想が普及する上で一役買ったようです。

イギリスで「社会配当」という考え方が出されるようになった頃から、アメリカの経済学者の間では、インフォーマルに「負の所得税」というアイデアが論議されていました。そうした考え方を詳述し、公共的な論議の場に持ちだしたのは、アメリカの経済学者のフリードマンです。現在、多くの国では、所得税額から一定の額を控除する税額控除制度が設けられています。所得税額がそれ以下の貧困層に対して、所得税率から最低生活費の相当分の金額を控除し、それが最低生活費を下回る場合は、その差額分を支給しようというのが「負の所得税」です。フリードマンは、「福祉官僚制度」への嫌悪や、「国のお荷物や厄介者」とされてきた人々を「責任ある個人」として扱うことができるという考え方から、このアイデアを支持したようです。ネオリベ経済思想の「大立て者」であり、思想的には「右派」とされるフリードマンまでもが、ベーシックインカム的な制度を提唱したことは、ある意味では興味深いことです。

## □「フリートーク」での論議から

以上で概観したように、7月12日と8月30日の「報告」では、レジメに沿って「ベーシック・インカム入門」のアウトラインが紹介されました。その後の「フリートーク」では、同書の内容や、ベーシックインカムを私たちとしてどのようなスタンスで捉えるかなどをめぐって、活発な論議が参加者同士で行われました。以下、そこでの主な論議を紹介します。

60年代末から70年代にかけて、アメリカの黒人のシングルマザーの運動や、イタリアの女性運動、イギリスの「要求者組合運動」といった、世界の様々な国で異なる課題に取り組む運動グループが共通してベーシックインカムを要求項目として掲げていることに、今回の「報告」の参加者の多くが強い印象を受けていました。また、「青い芝」の障害者運動も、そうした世界の各地での運動グループと軌を一にして、賃労働に優先的な価値を置く労働観への問いなおしを宣言しています。そのようなこの国の70年代の障害者運動の「同時代性」が、今一度思い起こされるべき時ではないかと思えます。

ベーシックインカムが最も熱心に論じられているのは、早くから「構造調整」という名でのネオリベ経済政策の強制による社会の破壊・亀裂化にさらされてきた中南米の国々です。最近、この国でも、ベーシックインカムに対する関心が高まっていますが、その背景には、まちがいなく、この数年、不安定労働者や「フリーター」たちが街頭で「声」を上げ始めたということがあるように思います。現在、私たちは、「豊かな北」と「貧しい南」という古典的な図式が崩れている時代を生きています。私たちが今、ベーシックインカムを要求した過去の運動を振り返ることの意味は、人間が自らの労働力を資本に「商品」として売って生きることを前提とするのではなく、「奪い取る」ものとして「生」の保障を要求するというところにあるはずで

「ベーシック・インカム入門」の中では、この国でほとんど知られていない、イギリスの「要求者組合運動」について詳しく触れられています。そのように、それまで共通の利害をもつとは見なされてこなかった人々が、公共サービスの「要求者」として結びつこうとした運動が存在していたということに、何人もの参加者が大きな感銘を受けていました。老人、障害者、シングルマザー、失業者といった様々な人々が共通の要求としてベーシックインカムや、住宅・生活必需品の無料化を訴えた「要求者組合運動」は、この国での「生」の保障要求運動がどのようにありうるのかを考える際の一つの手がかりになるように思います。

今回の「報告」では、「ベーシック・インカム入門」の前半の第1章～3章と、後半の

第4章～6章の2回に分けて、同書の内容が紹介されましたが、同書の前半と後半とでは、前半の内容の方が興味深いし、身近に感じられるという意見が何人もの参加者から出されていました。同書の著者が意識的に書き分けているわけではありませんが、同書の前半では運動の中での要求としてベーシックインカムがストレートに語られているのに対して、後半では、あくまでも経済政策や福祉国家の枠組みでの政策論として、ベーシックインカムを考察するというトーンが強いように思います。現在、この国でもベーシックインカムがある種のリアリティーをもって主張されるようになってきていますが、そのリアリティーとつながるのは、まちがいなく、前半で語られている無条件の「生」の保障要求としてのベーシックインカムの方のはずです。

賃労働で生きていくことができない人たちが社会の中に存在する以上、そうした人たちへの公的なサポートを行うこと抜きには、最低限の社会的な秩序や安定すら維持できないのは見やすい道理です。その意味では、ベーシックインカムの発想それ自体は、経済学者たちにとってそれほど極端な論議ではありません。同書の中で、ボランティア活動やケア労働、家事労働といった社会的に有益な活動に従事していることを条件として給付する「参加所得」という考え方が紹介されています。そのような考え方はベーシックインカムやそれに類するものをめぐる論議の中で一つの大きな流れとしてあります。

同書の著者は、ベーシックインカムは、私たちを「働かざる者、食うべからず」という脅迫から解放し、より自由な生き方を可能にするものであるということを何度も強調しています。そのような視点に立てば、「参加所得」に見られるように、あくまでも社会にとっての有益性や広い意味での「生産性」の向上といった条件付きで「生」の保障を考えるといった「政策論」的な発想から、ベーシックインカムは私たちを自由にしてくれるものでしょう。大胆に言えば、「働かなくても金を寄せ！」とでもいうような、「資本からの自律と自由」を訴えることを可能にしてくれるという、ベーシックインカムが孕む解放的な要素に、私たちは着目すべきではないでしょうか。

今、いくつもの不安定労働者や「フリーター」の労働組合が、組合の要求としてベーシックインカムを掲げるようになっていきます。それらは、しばしば、「生存組合」と自称していますが、労働問題だけではなく、多重債務問題といった生活相談や、イベント等を通じた交流の場をつくりだすことによる孤立状態の解消、自主運営に基づく共同住宅の創設といった、人間が生きることの様々な局面に関わる新たな「相互扶助」の実践が試みられています。私たちが「資本からの自律と自由」に向かおうとするものの先に、そうしたベーシックインカムならぬ、いわばベーシック「コモン(共)」とでも呼ぶべきものをどのように生み出しうるのか。まさに、そのように、私たちの想像力や「妄想」を喚起するという点にこそ、私たちがベーシックインカムを考えることの大きな意義があるように思います。

(パンフ No.3 に収録するにあたり、再編集した)